

『エチカ』の定義について

—ゲルーの発生的定義を中心に—

浅賀 優磨

『エチカ』の定義に関する研究のうち、最も代表的な研究の一つとしてマルシアル・ゲルー『スピノザ I』(1968)における「発生的定義」論がある。本稿の目的は、この発生的定義の内実を明らかにすることである。特に発生的定義を論じることの利点は大きく二つある。第一に、ゲルーによるスピノザ解釈の特徴をコンパクトに示すことができるという点。発生的定義という観点を以てこそ、ゲルーは『エチカ』第一部冒頭における神の定義の機能を明確に示すことができた。この功績は当時から特に評価されている¹。第二に、ゲルーが「表現の問題」と呼ぶところの、彼自身が扱おうとしなかった問題系の存在を示すことができるという点。ただこの点について、本稿では本格的に論じることができず、以後の方向性を示すに留まった。

神の定義は現実的か名目的か

まずは具体的な問題設定から始めたい。出発点は、ゲルーによる定義の区別である。『デカルトの哲学原理』の序文から、ゲルーは以下の二点を取り上げている。第一に、定義は「あらかじめ確かな事物から²」出発するべきであるということ。第二に、定義は「用語や名についての開かれた説明³」であるということ。この二点から、定義される対象によって、定義の種類が区別されることになる。定義の対象が「事物」である場合と、「用語や名」である場合との二つである。前者は「事象的定義 (définition réelle)」と呼ばれ、後者は「名目的定義 (définition nominale)」と呼ばれる⁴。この二つの区分は、『エチカ』冒頭にある諸定義を論じる際きわめて重要となる。例えば『エチカ』第一部の定義六として、神の定義というものがある。いわく「神とは、絶対無限の存在、いい

かえれば、各々が永遠・無限の本質を表現する無限に多くの属性から構成される実体のことである⁵。さてこの定義は結局のところ、「神」という事物を定めているのだろうか。それとも、「神」という用語を定めているのだろうか。このような問題設定は、『エチカ』の定義について考える上で、他の論者によってもしばしば利用されている⁶。それでは、この問題に対してゲルーはどのように答えるのだろうか。

定義についての書簡

スピノザは定義の本性を主題として、ある往復書簡を交わしている。1663年の書簡、フリースとのやり取りである⁷。その書簡では、二人の数学者の主張が話題になっている。一方の数学者ボレリいわく、定義は存在する事物を指示していなければならない。したがって「一定の空間を囲む二本の直線を図形と私は呼ぶ⁸」のような定義は、不可能なものを対象としているから、意味をなさない。他方の数学者クラヴィウスいわく、定義はある構成を表現するための任意の用語であり、事物との関係は別の話である。この二人の主張についてどのように考えるか、とフリースはスピノザに尋ねる。

スピノザが答えとして提案するのは、定義の種類を区別して考えることであった。彼の言葉をそのまま引用すれば、それは「ただその本質が求められている事物へ適用される定義」と「ただそれ自体が検討されるために立てられる定義」との区別である⁹。この区別をスピノザは「神殿」の例で説明する。前者の定義の例は、「ソロモンの神殿」という実在する事物を「描写」する場合である。この場合の定義は、その対象としての「知性の外にある事物」を持つ。したがって、定義とその事物との間に齟齬があるとき誤りとなる。後者の定義の例は、「私が建てようと欲する神殿」の場合である。この場合、それは「我々が概念化するような、または概念化し得るような事物の説明」としての定義となる。したがって「概念化されない」ような定義が誤りであるとされる。この後者の定義について、スピノザはボレリの例を利用して、説明を追加する。ボレリは「一定の空間を囲む二本の直線」を不可能なものとして避けた。しかし、この「直線」という言葉によって「曲線」という概念を指すと「定義」されて

いるのであれば、「一定の空間を囲む二本の直線」という定義は正しい定義となる。以上がスピノザの返事であった。

定義の対象の違い

この書簡のやり取りの関係はどう考えるべきか。まず、一通目のフリースによる書簡においては「数学者」が論者である点が重要である。というのも、二人の数学者が定義の対象として想定しているのは「直線」や「図形」などの幾何学的な観念であるからだ。ただ、一方のボレリは「存在する事物」とも述べている。しかし果たして「直線」は事物なのだろうか。ボレリの意見には幾何学と実在する事物の並存が見られる。他方のクラヴィウスについては、彼は定義と対象との関係を「構成の表現」と述べている。これは幾何学的な観念の身分を、事物とは区別して言い表そうとしているのであろう。

定義の対象は実在する事物であるか、幾何学的な観念であるか。二通目のスピノザによる書簡は、この事物と幾何学的な観念との違いを明確にする試みだと考えればどうだろう。すると問題は、「ソロモンの神殿」と「私が建てようと欲する神殿」との違いが、実在する事物と幾何学的な観念との違いに対応しているのかどうか、ということになる。

二通の書簡について問題を提起してみたところで、要点をまとめたい。定義される対象が何か、という視点がプリズムのようになる。定義の対象は、ボレリにとり幾何学的な観念と実在する事物との一体物であり、クラヴィウスにとり構成としての幾何学的な観念であった。そしてスピノザにとって、定義の対象は一方でエルサレム神殿、つまり知性の外の事物であり、他方で私が建てようと欲する神殿、つまり概念化し得るものの総体である。二人の数学者が、定義の対象として幾何学的な観念を想定しているだろうことは見てとれる。しかし、スピノザの二つの「神殿」が何を想定しているのか、それがこの書簡だけではわからない。

ゲルーによる定義書簡の分析

ひとまずゲルーが何と言っているか、見てみたい。この書簡について、ゲルーは以下のように分析している¹⁰。ゲルーによれば、この書簡では二つの問題が絡み合っている。一つは「名称 (dénomination)」の問題であり、もう一つは「概念化可能性 (concevabilité)」の問題である。ゲルーは、ボレリの提出した「一定の空間を囲む二本の直線」の例を、この二つの観点から整理する。ゲルーによれば、この定義が不適切である理由として、まずは適切でない名称を用いている点がある。しかし結局、この点は本質的なものになっていない。「直線」という名称について、それがふつつ指示する事物(実際の直線)を指示するのか、ふつつ指示しない事物(実際の曲線)を指示するのかという問題は、端的に慣習の問題でしかないとされるからだ。それよりも本質的な問題として、ゲルーは概念化可能性の問題を挙げる。それは、ある定義から「概念 (concept)」が獲得されないような場合である。その例として「偽観念 (pseud-idées)」が挙げられている。例えば正十面体、あらゆる数よりも大きい数、あらゆる運動よりも速い運動は、現実には概念として形成されない。ある空間を囲む二本の直線というものこの偽観念である。このような概念化不可能なものを対象とする定義は、本質的に悪しき定義となる。

以上のゲルーによる分析は、一見、書簡におけるスピノザの定義区分に倣っているように見える。たしかに「概念 (conceptus)」という言葉自体はスピノザも提出していた。しかし注意してみれば、上述の分析においてゲルーは概念化可能性という基準へ幾何学の観点を加えている。先にも述べたように、書簡のみからは「ソロモンの神殿」と「私が建てようと欲する神殿」との違いが、実在する事物と幾何学的な観念との違いに対応しているかどうか定かでない。つまり、概念と幾何学とを結びつけているのは、いってみればゲルー自身の見解なのである。別の箇所でも、ゲルーが形而上学と幾何学との密接な結びつきを強調していることも、その裏付けとなるだろう。彼は『知性改善論』を参照しつつ、幾何学と形而上学の両者は共通して、「おのずと」形成される観念に基礎付けられると主張しているのだ¹¹。

ゲルーにとっての定義

こうして、ゲルーは有効な定義の条件として以下の二点を提示することになる。それは第一に「定義が意味するところの事物の的確な名称」であり、第二に「定義が表現するものの概念化可能性」である¹²。この概念化可能性が幾何学的なものであることをもう一度確認しておきたい。さて、この概念と名称の議論を、冒頭で述べた現実的定義と名目的定義との区別と重ねて考えると、事態はさらに錯綜する。定義の対象による区別（つまり事物と用語との区別）は、概念化可能性と名称という条件と、どのように関係するのだろうか。そこには、事物と概念とを同一視し、また用語と名称とを同一視してよいのかという問題が待ち構えている。性急に『デカルトの哲学原理』序文の定義区分と書簡による定義区分とを同一視しようとする、現実的定義と名目的定義の関係がわからなくなる。

結論から言えば、これらすべての錯綜は「概念」の機能に起因している。定義とその対象との関係を軸に考え続けることが迷宮から脱するための導きの糸である。『デカルトの哲学原理』序文の定義区分は、その定義の対象が事物であるか、それとも用語であるかという区別であった。しかしゲルーにとって、定義の対象は常に「概念」なのである。そして名称の問題は、概念が確定した後、概念をどのように名付けるかという別個の問題として扱われることになる。この結論を理解するためには、概念とはいかなるものかをより詳しく検討する必要があるだろう。先にも述べたように、ゲルーにとって概念はある種の幾何学的な概念である。この「ある種の」という留保によって言いたいのは、概念は幾何学的な観念と完全に同一ではないということである。というのも、ゲルーは幾何学を範にとりつつ、概念がその動的な性格によって定義の生成を基礎付ける契機、これを描こうとしているからだ。

定義と概念のこの動的な相互関係は、ゲルーによる『エチカ』冒頭の分析の中で示されている。その分析が描いているのは、概念に促されることで神の定義が発生する過程である。『エチカ』の詳細な検討はあまりに長くなるので、以下では大まかに粗描する。

『知性改善論』における特質と要素の区別

定義と幾何学との関係について説明するため、ゲルーは『知性改善論』を参照する。『知性改善論』では、幾何学における定義について以下のように述べられている。例えば円という図形には、円周角の定理や接弦定理などのような「特質 (propriété)」がある。ただ、これら諸特質を以て円という図形を定義するのは適切でない。なぜなら円の定義は、円という図形の持つすべての特質が、その定義から導き出されるようなものであるべきだからだとされる。かくして、円の適切な定義は「ある線分が一方を不動の点として回転した時の他方の軌道」であるとされる¹³。この幾何学の例を取ることによって、ある定義から導き出されるものである諸特質と、その定義を「構成 (constituer)」するものである「要素 (élément)」と、この二つを区別することが可能になっている。例えば円であれば、線分、点、そして運動がここでは要素として想定されている。要素が特質に先立つものとしてある種の優位が与えられているのが分かるだろう。こうして、適切な定義を行うためには特質から区別された要素に依らなければならない、と結論される。

『エチカ』における要素の総合

いくつかの要素からはじまって定義が構成されていくという、この点は重要である。定義は始めから一挙に与えられるものではないということだ。実際、『エチカ』において神の定義は最初から与えられるわけではない。神は六番目に定義される。定義六の前には、その定義を構築すべき諸要素の定義があるのだ。それら要素とは「実体」や「属性」であり、前者は「それ自身でありそれ自身で概念化されるもの」、後者は「実体の本質を構成すると知性が認知するもの」という定義が与えられている¹⁴。神の定義の要素となるべきこれら定義について、ゲルーが公理的な性格を持っていると指摘しているのは重要な点である。公理 (axiome) とはさしあたり、いくつかの素朴な前提条件の設定である。例えば『エチカ』では、「存在するものはすべて、それ自身のうちにあるか、それとも他のものの中にあるかである¹⁵」というものが公理として挙げられてい

る。それでは、公理自体はどのように正当化されるのか。ゲルーによれば、公理や公理的な定義はその反対が「不可能 (impossible)」であることによってその正当性が確保される¹⁶。つまり『エチカ』の実際の出発点は、そうである他に考えられないというある種の直感を、それぞれ個別に要素として規定することだったのである。

こうした定義と公理の配置関係を考慮することで、ゲルーは次のように主張することができた。スピノザが独自に規定した実体や属性という諸概念が要素となって神の定義を構成しているということ、そして実在性や完全性のような伝統的な神的概念は神の特質として規定し直されているということ、この二つの主張である。これらをまとめた一節によって、ゲルーの発見を確認したい。

球が半円の回転運動によって生み出され、そしてそこから球のあらゆる特質を演繹できるのと同様に、神はその属性の無限性の総合によって、つまり神の概念が課すような総合によって生み出され、そしてそこから神のあらゆる特質を演繹することができる。¹⁷

複数の要素（ここでは属性の無限性）による「総合」から定義が構成される。翻ってその定義からは、それぞれの要素単体からでは導き出すことのできなかつたような諸特質が導き出される。言い換えれば、その定義から演繹されるあらゆる特質をあらかじめ知らなくとも、必要な複数の要素のみによって定義を構成することができるということである。ここで、引用した一節にある「概念」という言葉へ目を向けてみれば、神がある概念として目されていることが見てとれる。そして、総合による定義の生成を促しているのが、この概念であるとされている。つまり神の概念は、単に定義されるのを待っているような対象ではなく、定義されることを要求するような対象として考えられているのである。1661年にスピノザが書いた書簡には、属性などの諸定義と神の定義、この二つは「同時に (simul)」考えられなければならないと述べられている¹⁸。この同時性の強調は、諸要素の総合が単純な結合ではないことの強調であるとゲルーは言う。ゲルーによれば、だからこそ神の概念は「複合的な観念 (idée complexe)¹⁹」なのである。

我々は、複合的な観念へと移るやいなや、複合的な観念を構成する単純な要素それぞれの概念の限界を越えて、ひとつの主張を立てることを強いられる。要素それぞれを越え出るといふこのことの正当性は、定義されるべき事物の概念が設立するところの統一性において基礎付けられる。その概念は、構造の法として、諸要素の総合を要求し、別々に考えられていた諸要素それぞれの限界を越えてひとつの主張を課するのである。²⁰

それぞれの要素が複合的な観念を構成する。すると、さらに総合を強いるものとして概念が到来する。概念は新たな統一性を設立するような「構造の法」として、諸要素の組み合わせとしての構造を規定する。定義は、諸要素と複合的な観念とが同時に運動する契機を、概念という対象として定めるものである。このようにして生まれる定義を、ゲルーは「発生的定義 (définition génétique)」と呼んでいるのだ²¹。

小括

ここまでで述べた『エチカ』の分析は、定義の問題とどのように結びつくのだろうか。冒頭に挙げたひとつの問いから答えたい。神の定義は現実的か名目的か。ゲルーにとってそれはどちらでもある。というのも、神の定義の対象は神の概念であり、事物や用語を対象にしているわけではないからである。しかし、そのどちらでもあるというのはどういうことか。それぞれが理由を持っている。第一に、神の概念が実在するという特質を含んでいるので、神の概念は事物でもあるということ。第二に、神の定義は、神の概念に対して「神」と名付けるという点で、用語の説明でもあるということ。こうした理由から神の定義は、現実的であると同時に名目的、つまりは発生的なのである。

しかし、相変わらず一つの問題が取り残されている。それは名称の問題である。端的に言って、何故神の概念を「神」と名付ける必要があるのだろうか。ゲルーはこの問いを二次的なものとみなして回避している。ゲルーはこう述べ

ていた。「結局、一度固定されさえすれば記号は何でもよく、その取り決めとしての意味作用はもはや変化しないのだ²²」。定義の対象を常に概念として定めていることが、この発言を可能にしている。ゲルーは共時的な段階から通時的な段階への移行を、概念を支えにして考えているのである。まず概念とその定義が、要素として一度決定される。そうして後、個々に決定された要素は総合され、新しい概念とその定義が生み出されるというわけだ。してみれば、名称を確定すること自体が、概念の移行を示すためには重要なのであって、名称自体の任意性は否定し難く残る。

たしかに、ゲルーの発生的定義は、『エチカ』における論理的構造について、動的な「概念」を梃子にすることで、非常に整合的かつダイナミックな解釈を提出している。しかし定義の機能を中心に検討したとき、発生的定義はその対象を「概念」という一つのものにまとめようとするがゆえに、名称の任意性の問題を残しているのではないか。

ゲルー自身も名称の任意性の問題については意識していたようだ。しかし彼は『エチカ』において「記号 (symbole)」の議論が展開されていないという点を以て、この問題を二次的なものとして置くに留めている。そして彼はこの問題を「表現の問題 (problème d'expression)」と呼んでいる²³。こうした事情を総合すると、ゲルーと同時代のスピノザ研究者ドゥルーズによる『スピノザと表現の問題』との関係が見えてくるのではないだろうか²⁴。というのもドゥルーズは、定義が対象とする次元を「表現 (expression)」と「指示 (désignation)」とに区別することで、定義の機能を明確にしようとしているからだ。しかしこの点については、また別の機会に論じたい。

註

¹ 『スピノザ I』がどのように評価されたのかを示すものとして、『形而上学・道徳雑誌』に掲載されたドゥルーズによる書評がある。 Cf., Gilles Deleuze, « Spinoza et la méthode générale de M. Gueroult » dans *Revue de métaphysique et de morale*, octobre-décembre 1969, vol.74, no.4, pp.426-437.

² « De choses préalablement certaines ». Spinoza, *Œuvres I*, traduction et notes par Charles Appuhn, Paris, éd. Flammarion (poche), 1964, p.230. スピノザの著作について、ゲルーは

- 仏訳として Appuhn によるものを使用している。この仏訳が用いている訳語は、現在一般的である訳語と異なっている場合が時々ある。そのため、スピノザからの引用にはすべて Appuhn 版の仏訳を付けた。スピノザからの引用を日本語に訳したのは筆者で、その際にはゲプハルト版のラテン語、畠中尚志による邦訳、そしていくつかの仏訳を参考にした。今回特に参考にした仏訳として、以下の二つがある。Spinoza, *Éthique*, traduit par Bernard Pautrat, Paris, Seuil (points), 2010. そして, Spinoza, *Correspondance*, traduit par Maxime Rovere, Paris, éd. Flammarion, 2010.
3. « Des explications très ouvertes des termes et noms ». *Ibid.*, p.230.
 4. Cf., Martial Gueroult, *Spinoza I-Dieu*, Paris, Aubier, 1968, ch.1, §2, p.21. 以下この著作を SD と略記する。
 5. « Par Dieu, j'entends un étant absolument infini, c'est-à-dire une substance consistant en une infinité d'attributs dont chacun exprime une essence éternelle et infinie », EID6. Spinoza, *Œuvre III*, traduction et notes par Charles Appuhn, Paris, éd. Flammarion (poche), 1993. 以下この著作を E と略記し, EID6 とあれば『エチカ』第一部定義六を指す。また EIA1 は『エチカ』第一部公理一を指す。
 6. 具体的には, 上野修「スピノザ『エチカ』の<定義>」『アルケウ』(2012) pp.42-53, 秋保亘「スピノザ『エチカ』における定義の問題: 実体の定義と真理概念を中心に」『哲學』(2015) pp.1-24 を参考にさせて頂いた。前者の論文の註3において, 本稿の扱ったゲルーの発生的定義が簡潔に要約されている。
 7. Spinoza, « Lettre IX à Simon de Vries » dans *Œuvre IV*, traduction et notes par Charles Appuhn, Paris, éd. Flammarion (poche), 1966, p.142. 以下この著作を L と略記する。
 8. « Deux lignes droites enfermant un espace sont dites lignes formant une figure ». L, p.142.
 9. « Une définition s'appliquant à une chose dont on recherche seulement l'essence et une définition que l'on pose pour être seulement examinée ». L, p.142.
 10. 本文で要約したゲルーによる定義書簡の分析については, 次の箇所を参照のこと。SD, ch.1, §3, pp.23-25.
 11. 「もし形而上学が学として可能であるとすれば, 幾何学がおのずと理性の存在の観念を産出するように, 形而上学もまた, 知性がおのずと現実的な存在の観念を産出するという, この真の力能に賭けることができるのでなければならない」。« Si la Métaphysique est possible comme science, elle doit pouvoir, elle aussi, mettre en jeu cette puissance du vrai de telle sorte que l'entendement produise spontanément les idées des Etres réels comme en Géométrie il produit spontanément les idées des Etres de Raison ». SD, ch.1, §5, p.28. Appuhn は« intellectus »を« entendement」と訳しているので, ゲルーもその訳語を意識していると考え, ここでは「知性」と訳した。
 12. 「第一に, 定義が意味する事物の適切な名称。第二に, 定義が表現するものの概念化可能性」。« 1° la dénomination correcte de la chose qu'elle signifie ; 2° la concevabilité de ce qu'elle exprime ». SD, ch.1, §3, p.23.
 13. Cf., Spinoza, *Œuvre I*, traduction et notes par Charles Appuhn, Paris, éd. Flammarion (poche), 1964, §51, p.213.
 14. « J'entends par substance ce qui est en soi et est conçu par soi ». EID3. « J'entends par attribut ce que l'entendement perçoit d'une substance comme constituant son essence ». EID4.
 15. « Tout ce qui est, est ou bien en soi, ou bien en autre chose ». E, p.17, EIA1.
 16. Cf., SD, ch.2, §2, p.87.
 17. « De même que la sphère est engendrée par la rotation du demi-cercle et qu'on peut déduire de là toutes ses propriétés, de même Dieu est engendré par la synthèse de l'infinité de ses attributs telle que l'impose son concept ». SD, ch.4, §21, p.171.
 18. 「あなたが同時に神の定義を考慮しさえすれば, わたしがどこへ向おうとしているのか

を、あなたは容易に見て取れるでしょう」。« Vous verrez facilement où je tends pourvu que vous ayez égard *en même temps (simul)* à la définition de Dieu ». スピノザの書簡については L, « Lettre II à Oldenburg », p.113 を参照。1661 年は『知性改善論』を執筆していた時期と考えられている。

¹⁹ Cf., *SD*, ch.4, §21, p.171.

²⁰ « Dès que nous passons à une idée complexe, nous sommes contraints de poser une affirmation dépassant les limites des concepts de chacun des éléments simples qui la constituent. La légitimité de ce dépassement à l'égard de chacun d'eux est fondée dans l'unité qu'institue le concept de la chose à définir, en tant que, comme loi de structure, il exige leur synthèse et impose ainsi une affirmation dépassant les limites de chacun d'eux considéré séparément ». *SD*, ch.4, §21, p.171.

²¹ 「完全なもしくは発生的な神の定義（定義六）は、真の、しかし明示されない観念を使って実行される。それはつまり、最も実在的な存在という概念の規範のもとに実行される」。« La définition parfaite ou génétique de Dieu (*Définition 6*) s'effectue au moyen de son idée vraie, non encore explicitée, à savoir sous la norme du concept d'*ens realissimum* ». *SD*, ch.4, §21, p.171.

²² « Bref, peu importe les symboles pourvu qu'une fois fixés, leur signification conventionnelle ne vraie plus ». *SD*, ch.1 §3, p.25.

²³ Cf., *SD*, ch.4, §14, p.160.

²⁴ ゲルーとドゥルーズを比較する試みとしてマシュレイの次の小論がある。Pierre Macherey, « Spinoza 1968 : Guéroult et/ou Deleuze » dans *Le moment philosophique des années 1960 en France*, Patrice Maniglier, Paris, PUF, 2011. この小論において、マシュレイは三つの作品を取り上げている。ゲルー『スピノザ I』、ドゥルーズ『スピノザと表現の問題』、そして本稿の註 1 で挙げたドゥルーズによる書評である。これらを個別的に要約した上で、マシュレイはゲルーとドゥルーズが「意識の、そして主体の哲学を拒絶する」という時代を象徴する存在であるとしている。しかしそれ以上両者についての具体的な比較はなされていない。